

「幼児体育」における教材開発に関する一考察

高田佳孝

TAKADA Yoshitaka

本論文は、本学の必修科目である「幼児体育Ⅰ」における2016年度の授業実践報告である。「幼児体育」は、各種の身体運動（運動あそび、ゲーム、スポーツごっこ、リトミック、ダンス等）を通して、教育的角度から指導を展開し、運動欲求の満足と身体の諸機能の調和的発達を図るとともに、精神発達を促し、社会性を身につけさせ、心身共に健全な幼児に育てていこうとする営みであると考えられる。この授業では保育の中で行われる「幼児体育」を計画し実践するための基礎的知識と指導技術の習得を目的としている。その中の「運動あそび」では、身体活動を通して身体の発育を促したり、楽しさを味わわせたり、体力や技能を高めることをねらっている。また、さらに友だちと一緒に活動することで、社会性や精神的な面も育成することもねらっている。そこで教材の活用方法について、学生自身がこれらの効果の有効性を感じられるような授業展開をめざし、実践した。

キーワード：幼児体育、教材研究、教材の工夫

1. はじめに

日本では幼児体育の指導内容は、初等体育の指導内容を参考にして、構成が考えられてきた経緯がある。これまで歩・走・跳の運動、模倣の運動、リズム運動、体力づくりの運動（体操も含む）、用具を使った運動（ボール運動、縄を使つての運動、輪を使つての運動、廃材を使つての運動、タイヤを使つての運動など）、移動用具を使つての運動（平均台運動、マット運動、跳び箱運動、トランポリン運動など）、固定遊具での運動（つり縄運動、登り棒運動、ブランコ運動、すべり台での運動、鉄棒運動、ジャングルジムでの運動など）、集団あそび、運動ゲーム（鬼あそび、スポーツごっこ）、水あそび・水泳、サーキットあそび、雪あそび等が主な内容として紹介されている。

また、文部科学省の幼児期運動指針（2014）の取りまとめをうけて、幼児期の運動に関する指導参考資料第二集が刊行された（スポーツ庁、2016）。その中で多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること、楽しく体を動かす時間を確保すること、発達の特性に応じた遊びを提供すること、以上3つのポイ

ントが示された。これらに配慮しながら保育施設等での環境を整え、活用が促された。

幼児期の体育指導で大切なことは、運動の実践を通して、運動技能の向上を図ることを主目的とするのではなく、「幼児がどのような心の動きを体験したか」「どのような気持ちを体験したか」という「心の動き」の体験の場をもたせることが最優先とされなければならない（前橋、2008）

今日の子どもたちの様子を考慮すると、以下の3点を幼児体育のねらうこととして大切にしていきたい。

- ①自分で課題を見つけ、自らが考え、主体的に判断して行動していく意欲と強い意志力を育てる。
 - ②他者と協調し、友だちを思いやる心や感動する心をもてる豊かな人間性を育てる。
 - ③健康生活を実践できる体力や運動スキルを身につけさせる。
- （前橋、2008）

そこで本研究では本学必修科目である「幼児体育Ⅰ」の授業実践を報告し、受講生がどのような省察を行ったかを明らかにすることにより、幼児体育を指導する

上で有効な教材であったかどうか、また「幼児体育Ⅱ」で行う模擬授業をする際の教材開発の一助になるよう検証する。

2. 方法

調査期間：平成28年4月7日～8月2日
 調査対象：「幼児体育Ⅰ」履修者
 短期大学1回生91名
 収集データ：学生自身の授業記録
 授業後の省察記録

3. 授業展開とプログラム

表1 2016年「幼児体育Ⅰ」授業展開

科 目 名	：幼児体育Ⅰ
単 位（授業形態）	：1単位（演習）
担 当 者	：高田 佳孝・山中 愛美

授業の到達目標

幼児体育の基本について学ぶ。

ねらい：子どもにとって、成長期の重要な糧である「ごっこあそび・運動あそび」を通じて、身体表現・身体運動に関する基本的な知識や技能を習得する。

目標：大筋活動を主とした体育的なあそびを自らの創意・工夫をおり混ぜて実践する。

キーワード：幼児体育、ごっこあそび、運動あそび

授業の概要

「用具を使用しない、用具を使用する、身近な物を使用する」あそびを次の(1)～(5)の内容で活動する。

- (1) 競争を中心としたもの
- (2) 技術の進歩を中心としたもの
- (3) ゲームを中心としたもの
- (4) 模倣あそびを中心としたもの
- (5) 鬼ごっこを中心としたもの

全体の授業計画・内容

1. ガイダンス

2～4. 用具を使用しないあそび

- (1) ジャンケンあそび (2) かけっこリレー
- (3) カくらべあそび (4) ごっこあそび

5～7. 手具を使用するあそび

- (1) 輪 (2) 棒 (3) コマ

- (4) 縄 (5) 竹馬 (6) ボール

8～11. 大型用具を使用するあそび

- (1) マット (2) とび箱 (3) 平均台
- (4) 鉄棒 (5) パラバルーン

12～14. 身近な物を使用するあそび

- (1) 新聞 (2) 風船 (3) 風呂敷
- (4) タオル (5) ダンボール

15. 各自で創意工夫したあそびを発表する。

※講義の進捗状況によって内容の変更がある。

準備学習の方法

予習のあり方：次回のあそびについて情報を収集し、授業で発表する。

復習のあり方：実際に活動したあそびと自ら創意工夫したあそびを記録する。

成績評価

授業態度(55%)、実技テスト(25%)、提出物(20%)。尚、実技テスト(8種目)のすべてを合格することが評価の最低条件となる。

テキスト

授業中に資料を配布する。

参考文献

- 日本幼児体育学会『幼児体育—理論と実践—』大学教育出版
 羽崎泰男『イラスト版 からだあそび』合同出版
 菊池秀範『幼児期の運動あそびの指導と援助
 —鉄棒・跳び箱・マットあそびの補助を中心に—』萌文書林

表1で示すように多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れることや楽しく体を動かす時間を確保することを狙った授業展開であるが、発達の特性に応じた遊びを提供することに関しては領域の運動遊びが多く、全ての要素を網羅できているとは言い難い(スポーツ庁、2016)。そこで、履修者自身が自分で課題を見つけ自らが考え、主体的に判断して行動していくことや、他者と協調し友だちを思いやる気持ちを体験させる(前橋、2008)ことを狙って、主に縄を使った運動遊びを中心とした教材に焦点を当てた。

また縄を使った運動遊びは多くの学生が基本的な跳び方を経験していることや、学校体育の中において技の広がりを経験している者が少ないことも考慮した上で設定した。以上のことを踏まえ、この縄を使った運動遊びの教材を使ってプログラムを改変し、履修者自らの経験をもって、どのような省察をしたか分析することとした。なおプログラムについては次項で示す。

4. 考 察

表1に示した授業展開の中で、多くの教材の中から特に、縄を使った運動遊びに焦点を当て、学生から収集したデータから考察をする。「幼児体育Ⅰ」では、さまざまな運動遊びを行わなければならない現状から、一つの領域で取り扱うのではなく、いろいろな運動遊びをする中で、各授業時間の最初に帯として時間を確保して行うこととした。また、他者との関わりや協調性を意識した運動にねらいを絞るため、縄遊びの中でも特に長縄を中心とした運動遊びに特化した。以下に示したプログラムで授業を展開した。表2のはじめにある「かぶりなわ」は多くの学生が経験してきた跳び方であるが、2時間以降からは「かぶりなわ」の反対回しにあたる「むかえなわ」で行った。この「むかえなわ」は後にダブルダッチの動きにつながる。

表2 主に縄を使った運動遊びの授業構成

時間	内 容
1	長縄にチャレンジ ※かぶりなわで行う。 ・遮断機・通り抜け・1回跳び・1分間スピード跳び・5人跳び
2	長縄にチャレンジ ※むかえなわで行う。 ・遮断機・通り抜け・1回跳び・1分間スピード跳び・5人跳び
3	長縄にチャレンジ・1分間スピード跳び、かぶりなわ、むかえなわ ・足ジャンケン・片足・かけ足跳び・シンクロ跳び
4	長縄にチャレンジ・1分間スピード跳び、かぶりなわ、むかえなわ ・長短縄組み合わせ
5	ダブルダッチにチャレンジ・まわす練習・1回ぬけ・シンクロとび

表2のプログラムを実施した結果、以下のような学生からの授業記録が見られた。

- ・縄は跳ぶものだと思っていたけど、跳ばなくてもいろいろな遊び方ができることがわかった。
- ・長縄はいろいろなバリエーションがあって、思っていたより運動量があることを知った。
- ・回数を競うことでより跳びたい気持ちが高まった。
- ・自然に周りの人に声をかけられる運動だと思った。
- ・「むかえなわ」になるだけで難易度が上がった。

上記から、学生たちは表2のプログラムによって今まで経験してきた長縄跳びの概念を打ち破られたと推察できる。そしてこれらの経験によって、幼児体育は杉原(2000)が主張する「課題志向やマスタリー志向」(努力や過程を重視する立場)で指導することが重要であることに気づけたのではないかと考える。指導者

のもつ目標指向性の違いから、子どもの行動や集団の雰囲気が大きく異なってくるのが明らかにされている(杉原2008)。すなわち、パフォーマンス志向よりマスタリー志向の方が子どもたちは運動に対して有能感をもち、内発的に強く動機づけられ(井上ら、2008)、うまくいかなくてもいろいろと工夫して努力を続け、友だちと仲よく運動を楽しむようになることが明らかにされている(杉原、2008)。運動遊びは競技スポーツではないので運動の上手下手を比較するものではないし、勝ち負けや競争も楽しくするための一助として考えている。

表2のプログラムでは動きの幅を広げたり、回数や競争を取り入れたりして意欲を高めたが、表3に示すように7時間目以降の授業の後半では前半に培った動きを生かして、さらに動きの広がりを狙ったプログラムに改変した。改変した主な点は以下に示すとおりである。一つは長縄を跳びながら、主にボール操作(投げ上げ、ドリブル、パスなど)を取り入れ、組み合わせの運動を増やした。もう一つは授業が進むにつれ、長縄に取り組む時間の割合を増やし、難易度を上げていった。

表3 改変した主に縄を使った運動遊びの授業構成

時間	内 容
7	長縄にチャレンジ ※かぶりなわで行う・1分間8の字跳び・1回跳び・床タッチ・落とし物ひろい・2人で入る・移動しながら跳ぶ
8	長縄にチャレンジ ※むかえなわで行う・1分間8の字跳び・1回跳び・床タッチ・落とし物ひろい・2人で技をする・移動しながら跳ぶ
9	長縄にチャレンジ・1分間8の字跳び・ボール投げ上げ・ドリブルかけ抜け・ドリブル(ボール1個)・中外でパス・2人跳びでパス
10	長縄にチャレンジ・1分間8の字跳び・ボール投げ上げ・ドリブルかけ抜け・ドリブル(1、2個)・中外パス・2人跳びパス・バスケシュート
11	ダブルダッチにチャレンジ・まわす練習・中外でパス・2人跳びでパス・短縄を組み合わせ

~~~~~は改変したプログラム

表3のプログラムを実施した結果、以下のような学生からの授業記録が見られた。

- ・難しくなって跳べなくてもみんなでやっている楽しさを感じる。
- ・たくさん的人数でも課題が共有できた。みんなで乗り越えていこうという意欲がわいた。
- ・ボールが入ることで動きの幅が広がった。
- ・前にできていた動きを生かして、新しい技に挑戦で

きてよかった。

- ・難しいと思っていたけど、意外とできた。
- ・できなくても、みんなと一緒に楽しく取り組めた。

上記から、前半で培われた仲間意識が働き、みんなが課題解決をしようという心理が強く働いたことが推察される。また長縄に取り組んだ当初から、できなくても笑顔が見られ、跳べなくても挑戦することで楽しさを感じる様子が見られた。本来さらに動きの広がりを狙ったプログラムになれば、「できる、跳べる」ためのレディネス（下中、1981）が備わっていないなければならないが、新しい長縄の遊びを経験したことで積み上げができ、難しい課題に挑戦する意欲がわいたと考えられる。また縄を使った運動遊びに対して受け身な態度で履修していた学生についても、主体的に関わろうする姿が少しずつ見られるようになった。教材には子どもに習得させたい認知的・技術的、そして社会的行動の学習内容が明確に盛り込まれている必要がある（岩田、2012）が、その内容の中で社会的行動が一番身に付いたプログラムであったと考える。

## 5. まとめ

今回のプログラムは、将来幼児体育を指導する立場となるであろう履修する学生を対象とした。したがって本当に子どもたちに指導したときに、どのような反応や手応えを感じるかは未知である。本来であれば、「縄跳び」が跳べるようになることが、小学校段階での学習課題になるが、幼児期はそのレディネスを蓄える時期である。課題を先取することを優先し、「できない」という気持ちを子どもたちに蓄積させ、運動嫌いな子どもたちを育てることを回避しなければならない。本プログラムの内容は、学生らの運動欲求を満たすことも踏まえ、小学校中学年程度の指導内容であったが、自らが身をもって体験した遊びであるが故に、その遊びのもつ本質的な楽しさや特性に触れることができたのではないだろうか。

現場経験のない学生にとって、幼児がどの程度の運動能力や認知能力が備わっていることを把握し指導することは、決して容易ではない。しかし指導者として発達段階によって適切な教材を与えることの重要性や、実態に合わせて指導内容を変容させる大切さを学ぶことは不可欠である。この「幼児体育Ⅰ」での経験を、

後期に履修科目となる模擬授業中心の「幼児体育Ⅱ」で指導内容を検討する際に大いに役立ててほしいと願う。

今後は継続研究として「幼児体育Ⅱ」の模擬授業における教材開発も視野に入れて検討を加えていきたい。その際は本検討に不十分であったところを補足しながら、質問紙等のデータを収集し検証する。

## 6. 引用文献・参考文献

- 文部科学省（2014）幼児期運動指針 幼児期運動指針 策定委員会
- スポーツ庁（2016）幼児期の運動に関する指導参考資料第二集 平成27年度幼児期の運動に関する指導参考資料作成委員会
- 前橋 明（2008）幼児体育—理論と実践— 大学教育出版 pp.10-12
- 文部科学省（2014）学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動（改訂版） 東洋館出版社
- 杉原 隆（2008）新版幼児の体育 建帛社 pp.48-50
- 井上寛崇、岡澤祥訓、元塚敏彦（2008）体育授業における運動有能感を高める工夫が運動意欲および楽しさに及ぼす影響に関する研究  
—運動有能感の高い児童生徒の視点から—  
奈良教育大学研究紀要 pp.103-111
- 下中邦彦（1981）新版心理学事典 平凡社
- 岩田 靖（2012）体育の教材を創る 大修館書店 p.25

## ピアスーパーバイザーからのコメント

本稿では限られた授業時間の中で様々な領域の運動あそびを経験することと平行して、特に一つの教材を用いた活動を各授業内の一定の時間、継続して行うという教育実践が紹介されています。このプログラムでは長縄を使った様々な競争やあそびが展開されていますが、学生の感想からは単に課題をクリアすることが目的ではなく、目標に到達するまでの努力や協力の過程を重視することの大切さを実感できたことが窺えます。保育、教育者養成の授業では、子どもの心がどのように動いたか体感できる場をつくる必要がありますが、そのためには、まず学生自身が興味をもち、楽しみながら達成感を感じることが

できる教材の活かし方が大切であることを改めて感じました。

(担当：佐藤 有紀)